

身近なまちの風景物語(3)

緑の装い

見渡す限り稲穂が広がる田園地帯を歩くと、目に映る緑は優しい。

心地よい風を感じながら歩みを進めると、緑の匂いがある。

まっすぐ伸びる農道で耳を澄ませば、緑の音が聞こえる。

県南の田園地域では、鬱然と生い茂った高木の垣根を見ることがある。壁状に刈り込まれた隙間からは家屋が見え隠れし、周りには家屋全体を覆い隠すように屋敷林が植えられている。

このような屋敷林は、筑波^{おろし}嵐のような強い風から家屋を守るように、一方向、あるいは複数方向に配列されている。

日々の暮らしの場に、木の葉のフィルターを通したさわやかな風を招き入れ、陽射しも和らげてくれる屋敷林。家を守り、暮らしを守り、暑さや寒さから守ってくれる、内と外とをしなやかにつなぐ柔らかい境界である。

かつては、建築材料になるような樹種をはじめ、食用の木の実がなる樹種などが植えられていた。落ち葉

や枯れ枝は、暮らしに光を灯す燃料として、また、自然の実りをもたらす田畑の肥料として利用されてきた。

現在見ることができる屋敷林は、樹齢を想定すると「百年単位の風景」といえる。

この風景からは、自然とともに暮らす住民の気構えを感じることができる。そこには、代々受け継がれてきた「暮らしの作法」が残っている。

きれいに切り揃えられた垣根には、凜とした暮らしの姿勢が表れる。家屋との一体感、快適さと風格。そこには、美意識が宿っている。

田畑の風景は、季節ごとの変化に富む。一方で、常緑樹の垣根には、土地に根づいた安定感を感じることができる。

木々のゆっくりとした成長は、その家族にずっと、そして、そっと寄り添っている。屋敷林に抱かれた暮らしには、風土に根ざした豊かな営みを見ることが出来る。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）